孤独な愛され女王蜂
１３【完】

孤独な愛され女王蜂　１３【完】

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19566633

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, ♡喘ぎ, オメガバース, 男性妊娠

誰得？俺得！なオメガバースパロ、最終話です。オリジナル設定含みます。ヨシ霊ですがビッチ師匠総受けです。今回は本番はヨシ霊です。♡喘ぎ、男性妊娠あり。倫理がまたもやアレ。お好きな方はお付き合いください。本当にありがとうございましたー！

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

1人目の父親は芹沢です。男の子で名前は新佳（あらよし）。２人目も男の子で泰隆（よしたか）です。相談所に連れてきて所員に可愛がられています。

孤独な愛され女王蜂　１３【完】

ドがつくビッチオメガである霊幻新隆には、運命の番がいる。
だが、彼の本当の『運命』と呼べる存在は、影山茂夫だろう。
優秀であるにも関わらず、オメガだからという理由で同期と出世の差をつけられた霊幻新隆は、馬鹿々々しくなって会社をやめた。
ならばと始めた霊能事務所も、思っていたよりもつまらなくて。
止めようと思っていた時に、まだオメガバース性未分化の影山茂夫と出会ったのだ。
超能力があるという彼を最初は疑い、適当にあしらおうとした霊幻新隆は、しかしアルファの中でも飛び抜けて貴重な能力持ちの影山茂夫の力を目の当たりにしてしまう。
そして思ってしまったのだ。
この力と関わることで、自分もただのオメガから抜け出ることができるんじゃないか、と。
次第にその気持ちは影山茂夫と過ごすうちに、かけがえのない庇護愛に変わり、そして相談所は弟子を守り育ててきた大事な場所となった。
霊幻新隆という男を語る上で、影山茂夫と、霊とか相談所という場所は、切っても切れない。
そして彼が女王蜂として警察にマークされることになったのも、その相談所に寄るところが大きい。
霊幻新隆は育ちにより貞操観念が破壊されており、それが幸か不幸か、珍しい『アルファを怖がらない』特質として現れていた。影山茂夫の知り合いとして、客として相談所に出入りするアルファたちには、それはとても居心地のいい特質であった。
安心と居心地の良さが、恋慕や独占欲に変わるのに時間はかからなかっただろう。
子供はいつしか大人になる。霊幻新隆の愛情を当然のように甘受していたアルファの子供たちは、立派なアルファの男になり、そしてアルファ差別にも直面して、それが当然では無かったことを知るのだから。

そして相談所にいけばいつでも嬉しそうに出迎えてくれる愛しい存在が、『オメガ』なのだと強く意識してしまえば、あとはなし崩しだ。
大人になれば、霊幻のだらしない恋人関係にも気がつく。
ちょっと本気で「ヤらせろ」と迫れば、霊幻新隆は「大事なモブたちにアルファとして道を踏み外させるよりは」と誰にでも身体を許した。……それが泥沼への扉を開けることになると気が付かずに。
元アルファの子供たちは霊幻新隆の寵愛を得るために水面下で争い、そして霊幻新隆そのものの恋愛感情に問題があることに気が付いてからは、結託して「自分が」霊幻新隆を独占するのではなく、「信頼できる自分達が」独占する方向にシフトしていった。
こうして外部から見ると『霊幻新隆が超能力持ちの優秀なアルファを従え囲い込んでいる』危険な巣が完成したのだ。
が、その実体は霊幻新隆をただ愛し慕っているアルファの集合体に過ぎない。霊幻新隆がいたって健全な倫理観と庇護欲を持っている以上、アルファたちをそそのかして犯罪行為をすることは考えにくく、当初警察が危惧していた扇動の危険性はほぼ無いと言っていいだろう。
「……むしろ、警察としてはこの集団の有用性に目を付けた」
ヨシフが説明しながら書類を差し出しているのを、霊幻新隆は眉根を寄せて睨むように読んでいる。
「霊幻新隆の鶴の一言でこれだけ優秀なアルファが組織的に動いてくれる。……これはかなり魅力的だ」
ちら、と霊幻は怪訝な顔をしてヨシフを見上げる。
「という訳でだ。警察はこの相談所を正式な提携先として指定した。窓口には俺がなる。これからよろしくな、先生？」
トメはぽかんとお盆を持ったまま立ち尽くし、エクボと芹沢は苦々しく顔を歪める。
これからヨシフが頻繁に相談所に出入りするということだからだ。
「……モブや芹沢を警察の危険な現場に行かせる訳にはいかない。ことわ」
「この事務所、今、経営ヤバいんだってなぁ？」
悪そうな顔をしてヨシフが火のついてないタバコを咥えて笑う。

「それに、完全にクリーンな経営ってわけでもなさそうだ。……これを断れば警察を敵に回すぜ？いいのか、センセイ？」
「ぐ、ぅっ」
霊幻は悔しそうに顔を歪めて顎を掴んだ。
「……分かった。警察と提携しよう。ただし！情報提供も、所員の貸し出しも、俺が駄目だと判断したら断らせてもらう。俺が同行できないような仕事もだ。それが飲めないならどんな脅しをかけられてもこの話は聞かなかったことにするからな！」
ふ、と嬉しそうにヨシフは笑った。
「……やっぱりいいなあ、先生。しっかりしてるし目の付け所がいいよ。俺の目はたしかだった」
「な、なんだよ突然」
霊幻は照れてほんのり赤くなる。
「先生、この事務所辞めて警察のエージェントにならねぇか？」
がしゃん、とトメがお盆とお茶を取り落として、それを慌てて芹沢が空中で超能力でキャッチした。
「は？」
「強面のアルファばっかりだとやりにくい仕事も多くてな……前からオメガのエージェントは募集して探してたんだが、中々適任が居なくてな。センセイなら肝も据わってるし、ハニトラも余裕だろう？どうだ、俺とバディ組んで世のため人のために働いてくれねぇか？」
す、と霊幻の左手を取ってヨシフはその甲にうやうやしく口付ける。
「──今後は俺たちの女王蜂になってくれ」
「ちょっと！」
トメが必死の形相で割り込んでくる。
「話が違うわよ、ヨシフさん！」
「そうか？『霊幻の幸せのために』というのは間違っちゃいないと思うが？……福利厚生しっかりしてるし、給料も桁違いだぜ？」
「でも、霊幻さんを私たちから取り上げるなんて……！許せない！そんなことに私を利用したのね！？」
「ま、そうなるな」

「……っ！」
怒りに震えるトメに。
「トメちゃん、大丈夫だから」
びっくりするほど穏やかに──菩薩のように霊幻新隆は微笑んでいた。
「ヨシフ、俺がこの所長の椅子に座ってることで、守られてる平和もあるんだ。……分かるか？」
霊幻が足を組み直すと、きし、と玉座が音を立てた。
「……分からねぇな」
「だろうなぁ。恋人のお前にも、俺の悩みってのは理解できねぇんだよ。俺は孤独な女王蜂だ。オメガで、ビッチで、……モブの師匠で、芹沢の上司で……。俺と同じ境遇のやつは、この世に 2 人といないだろう。だから俺は」
女王蜂は美しく玉座で微笑む。
「どう俺の周りを治めていくのか、俺だけで決めていかなくてはいけないんだ。……それはお前のことも含めてだよ、ヨシフ。俺がお前と居られるように色々と考えてくれたんだろう、ありがとうな。でも、」
霊幻は身を乗り出して、すり、とヨシフの頬を撫でる。
「その提案をどうするかは俺が決める。お前はそれに従え」
凛としたその声に、ヨシフは目を細めた。
「──おおせのままに、我らが女王」
ヨシフは芝居がかった仕草で片手を広げて頭を下げ、膝を曲げて腹にもう片方の手をつけて礼をする。
「分かった、俺はお前を支える騎士でいよう。孤高のアルファの女王よ、お前に仕えられることを俺は誇りに思うよ」
霊幻は目の前の演技屋に苦笑する。
「大袈裟だなァ」
「でもそういうことだろ？お前を愛するってことは、働きバチの 1 人になるってことだ。ま、お前のスカウトは諦めねぇから、いつでもパートでも大歓迎で待ってるからな」
困ったように霊幻は笑う。
「その気持ちに俺はどう応えたらいいんだろうな？──ああ、そう

か」
くす、とイタズラっぽく笑って、霊幻は楽しそうな恋人の手を取る。
「いいよ。許可しよう。──俺を愛することを、許してやるよ」
霊幻が恋人の手に口付けると、２人は芝居がかったやり取りに我慢できず、弾かれたように笑い出した。
相談所メンバーは、とりあえず霊幻がスカウトされて連れ去られていかないことに、胸を撫で下ろした。

今日も孤独な愛され女王蜂は、相談所の玉座で微笑みながら、アルファやオメガの、……ベータさえもの、その平穏を守っている。

※

父親の分からない子供を産んで１年が経った。
「次は俺の子供を産んでもらうからな」
「そりゃまぁそうだよな」
警察と業務提携をし、ヨシフとしょっちゅう会うようになって、さらにヨシフもなるべく霊幻と子供の待つ寮に帰るようになり、霊幻の浮気はかなり減った。
とはいえこれまでのことがあるので、完全には火遊びを止めることはできてはいないのだが……。
霊幻は「相談所メンバーに恋人が出来れば俺との関係は自然消滅す

るだろうから気長に待ってほしい」と弁解しているが、ヨシフは本当にそんな日がくるのか？と疑いの目でチベットスナギツネみたいな顔になりながら聞き流している。
とにかく。
ヨシフは霊幻との子供が欲しかった。
本能と理性で話し合っても１００％「孕ませよう」と意見が一致する案件だった。
「霊幻、次のヒートいつだ？」
子供と犬模様のラグに寝転がりながら遊んでいた霊幻が、耳を赤くしてピクリと反応する。
「……もうすぐだと思う」
「よし、それに合わせて特別休暇申請するからな。……子作りするぞ」
「な……っ！」
直接的な物言いに照れた霊幻はクッションを思わずヨシフに投げるが、パシっとキャッチされてしまった。
妊娠率の低い男オメガでも、確実に排卵が行われるヒート中に、毎日大量に中出しされ続ければ妊娠はほぼ確実である。
それをするぞ、と宣言されたのだから、照れもするというものだ。
「お前も相談所休めるようにしておけよ」
「ん……」
顔を赤くして頷く霊幻。

そして。

その日が来た。

「は、ぁ……っ、よしふ……っ」
ヨシフの服に包まれて、裸の霊幻は熱っぽい息を漏らす。
「まってろ、すぐ行く……っ！」
ヒートになった霊幻のフェロモンが充満していて、ヨシフも理性が飛びそうだった。
だが死んでも手荒には抱きたくない。それはヨシフの矜持だった。

ヨシフはばさばさと服を脱ぎ捨て、その鍛え上げられた身体を惜しげもなく晒しながら、ベッドの上でうずくまる霊幻の元に向かった。
「大丈夫か」
霊幻がかき集めてきた自分の服を剥ぎ取る手つきが、どうしても荒々しくなる。
「だぃぶ、きつい……ヨシフ、ちゅーして、ぎゅってして」
弱々しく手を広げて待つ霊幻に、ヨシフは思わず目を手のひらで抑えて天を仰いだ。
「それは反則だろ先生……」
可愛い罪でしょっぴきたい気分である。そんなものは無いが、探せばきっとあるに違いないとヨシフは思った。
「……？してくれねぇの？」
うりゅ、と涙を浮かべる霊幻に、ぐわっと怖い顔を寄せてぷちゅっと性急にヨシフは口付け、ヒートでほのかに赤く染まる身体をしっかりとかき抱いた。
「ん、んん……っ」
霊幻は侵入してこようとするヨシフの苦い舌を唇でフェラするようにしごいて、それから先端をぷちゅ、くちゅっと音を立てて吸ってから、ふにゃりと笑った。
「よしふだぁ……っ♡」
「〜〜〜〜っ！！！」
愛しくてたまらない、というような顔で微笑まれて、ヨシフは本当にどうしてやろうかコイツ、と頭を抱えたくなった。
「クソビッチめ……ッ！」
「えぇ？突然の悪口……」
ぶち犯す、という警察官にあるまじき思考しか回らなくて、思わずヨシフは悪態をついた。
「……すまん、余裕無くて……一回抜いてきていいか？」
「えぇ、勿体無い……出すなら俺の中で、だして……」
くぱ、と音を立てて、霊幻が自らのアナルを広げる。
ヒートで濡れたそこは、くちゅりと音を立ててぬらぬらと赤く照りながら、ヨシフを誘っていた。

「ほんとお前、ほんっと……なんだ？俺の理性を壊すのが目的なのか？」
「なに言ってんだよ……ヒートでふわふわだから、１回挿れて出しちゃえよ」
「〜〜〜〜っ、おまえな、せっかく人が優しく抱こうとしてるのに！！」
ヨシフはがっと霊幻の足を掴む。
「あ、っ♡」
性器を掴んで霊幻のアナルにあてると、本人の言う通りほぐれていたそこは、ぐぷ、と嬉しそうにヨシフを咥え込んだ。
「……っ、ちょっ、と、待て……っ」
熱い。それに、くぱっ♡きゅぱっ♡と小さく音が鳴るほどに、激しくナカはウネっていた。
「ヒート中のオメガんナカは、すげぇだろ」
にやっと得意そうに霊幻が笑う。
「一回出しちゃえよ。ほら奥まで……入ってきて……」
ぐ、と霊幻が腰を進めて、ぐぷぷぷとヨシフを根元まで飲み込む。
「ばっ……！！」
ヨシフはこめかみに青筋を立てて耐えようとしたが、肉壁のしゃぶりつきに身体がぶるっと震えるほど追い詰められ、思わず射精した。
「ん……いっぱい出てるな……？ごちそーさん♡」
腹を押さえながらペロリと舌舐めずりする霊幻を、きっと情欲にまみれた瞳でヨシフが睨みつける。
「やってくれたな……たっぷりお礼するから、期待してろよ」
そのギラつくアルファの瞳に、思わず霊幻は逃げ腰になる。
「あ、んっ！♡」
腰を引き戻されてず、とまた奥まで侵入されて、甘い悲鳴を霊幻は上げた。
「バックからやるぞ、いいよな」
「うん、いいけど……」
「なんだ」
ちょっと恥ずかしそうに霊幻は口籠る。

「顔が見えないの、寂しい……」
「ングぅッ！！！」
ヨシフは思わず心臓を押さえて呻いた。なんだこのビッチ。わざとやってんのか、と疑いたくなる。
ギャップが。ギャップがヤバい。
「よ、ヨシフ？」
もはや愛しさでズキズキ痛む心臓を宥めながら、ヨシフは息を整える。
「……ちょっと我慢しろ」
「……じゃ、手、ぎゅってして」
ヨシフは可愛さで心臓が止まるかと思った。マジで腹上死する危険性をヨシフは憂慮した。
「ン、っ……」
ヨシフは挿れたまま心を無にして体位を組み替える。
「あ、ぁ、」
後ろからのし、と覆い被さると、結合が深くなった。
「ん……」
快感を逃すように霊幻が鼻にかかった声を漏らす。
それを耳障りよく聞きながら、ヨシフはぴちゃ、と霊幻のうなじを舐めた。
「ア、っ！？」
オメガとして敏感な部位を突然責められて、びくりと霊幻は身体を跳ねさせるが、しっかりとヨシフが掴んでいる手のせいで逃げられない。
「あ、ぅ、ん、んんっ！？」
吸ったり甘噛みしていたうなじから、ヨシフの唇が下へずれていく。
「ん！」
と、同時に浅くナカを叩かれて、思わず霊幻はまくらを噛んだ。
ヨシフは霊幻の背骨の出っ張りを、一つずつなめしゃぶっていく。
「ぅ、ん……っ、」
ぞわぞわと、日頃あまり人に触れられない部分への刺激に快感と不快感の狭間を霊幻は味わう。

「は、ぁ……っ！」
だがそれは、次第に刺激される前立腺からの気持ちよさも相まって、鳥肌立たせる感覚へと変わっていった。
「カワイイなぁ、カワイイよ、新隆さん」
「……っ！」
背中を舐めながらこぼされる、滅多にしない呼び方に霊幻は翻弄される。じわん、と嬉しさが霊幻の中に灯って、それが心を快感に素直にさせた。
「よしふ……もっといっぱい、ちゅっちゅして……？それ、きもちい……っあ！」
浅いところで前立腺を責めていた逸物が、ぐぷ、と奥に侵入してきた。
「これはお前が悪い」
凶悪な顔をしてヨシフが唸る。
「何っ、それっ、あっ！？」
ヨシフは片手を離して、霊幻の性器に筒のようにあてがった。
「やめ、やめてっ、きもちよすぎるからぁっ！！それっ、やめっ、」
「そいつはいいことを聞いた」
ヨシフは腰を打ち付けながら、霊幻の性器を手で容赦なく扱く。
「あああぁっ！！やらぁあぁあっ♡」
「なぁセンセ、後学のために教えといてやるが、」
ベロリとヨシフは霊幻の耳たぶを後ろから舐め上げ、食む。
「スパイに弱みは教えちゃダメだぜ」
「ぁ……っ♡」
ぐり、とヨシフに鈴口を擦られて、びゅっと勢いよく霊幻は射精する。
「……っく」
ヨシフもぎゅっと霊幻を抱きしめて、奥に擦り付けるようにして吐き出した。
「よしふ……次は前からがいい」
甘く掠れた声で霊幻がおねだりする。
「……分かった」

身体を動かすと、中出しされた精液が隙間から漏れて、こぷっと音を立てた。
「……なあヨシフ、お前のって大きいよな。ほら、ここまで入ってる」
体制を整えた霊幻が、クスッと笑って腹をおさえる。
「こんなの孕ませ確定じゃん。さっきから量も多くてさ、」
ぎゅ、と霊幻が腹の上からヨシフの性器を押すと、内部の精液がぐちゅっと音を立てた。
「子作りしてる、って感じだ……♡」
妖艶に笑う霊幻にヨシフは煽られる。
「なんだ、して欲しいことでもあるのか、先生？」
「んー？ふふ……」
する、と霊幻はヨシフの首に手を回した。
「おなかいっぱいにして♡」
ぶち、とヨシフの頭の中の何かが切れた。
「あ、あ！♡すご、すごいっ♡ガチガチのが、抉ってくるっ♡♡」
「……っ！……っ！」
どちらのものともつかない荒い息が、ぱちゅぱちゅと結合部がぶつかり合う音と共に部屋に響く。
「ヨシフ、イくっ♡メスイきするっ♡♡」
「イけ……っ！」
ずりゅ、と大きな亀頭で前立腺を、結腸を叩かれて霊幻はその白い喉を逸らした。
「ぁ…………っ♡♡♡♡」
「……っく、孕め、孕め……！！」
絶頂の余韻で震える内部に、ヨシフは射精しながら押し込むように性器を打ち込む。
その様子をうっとりと眺めながら。
「ヨシフ、もっと……子作りしよ？」
ヒートに酔う霊幻新隆は、足でツガイを抱き寄せた。
「「愛してる」」
確かめ合う行為は、その結晶へと結実して。

※

「あれ？師匠、またマタニティスーツにしてるんですか？」
茂夫は不思議そうに所長の椅子に座る霊幻を眺める。
「うん。また妊娠したんだ。……今度はヨシフの子だ」
へえ、と茂夫の顔が喜びに輝く。
「また師匠の赤ちゃんが見られるんですね、嬉しいなぁ。今度は男の子ですかね、女の子ですかね？うわー楽しみだなぁ」
その様子に霊幻はクスッと笑う。
「さあ、どっちだろうなぁ」
穏やかに腹を撫でる霊幻をトメと芹沢と茂夫が幸せそうに見守っていて。

今日も霊幻新隆は皆に愛されながら、……そして皆を愛しながら、女王蜂をやっている。

完